

# 「東大科哲の会」設立趣意書

1998年10月

趣旨：東京大学科学史・科学哲学研究室は、1953年の第1期生卒業以来、今日まで凡そ300人を超える卒業生、大学院修了者を社会に送りだしました。その間、同窓会は、先生方の定年退官等の折に不定期に開催されておりました。

同窓会に近い組織として「東大科哲シニアの会」があります。これは新製の科学史・科学哲学研究室の第1期～20期卒業生を中心として、創設以来の教官の方々にも参加頂き、定期的に活動を続けて来ました。過去及び現在の教官の方々も卒業生と同等の資格、としている点がやや異色ですが、実質的には初期、中期の卒業生の同窓会に近い性格付けで運営されて参りました。然るに、最近の大学院主体への東大の組織改革等、時代の変化も激しく、東大科哲シニアの会も性格やあり方を見直す時期に来ていると考えられます。去る4月4日の本年度定例会にて別紙会則案に述べるような形で第1期生から新卒生迄の合同の東大科哲の会（仮称）を新たにスタートし、シニアの会はこれに発展的合流を図ることを提案し出席者全員のご賛同を頂きました。ここに定例的に会を開催し、併せて名簿の整備を規則的に行う等継続的な活動の主体としての「東大科哲の会」の設立を提案致します。

意義：一般に学科、研究室の同窓会の持ち方は、同窓生の考え方により様々で、全卒業生を組織化して定例会の開催、名簿・会誌の定期発行を行っている所もあれば、交流は同期会主体という所もあるようです。

我が科学史・科学哲学の場合、毎年の卒業生の数が少なく、同期会は一般に困難です。又、物理や化学の場合、物理学会や化学会等の大きな学会に所属する人が多く、卒業後の交流も先輩、後輩も含めてこうした学会等の場で実質的に抵抗なく行われているようです。科学史・科学哲学の卒業・修了者の活動範囲は多岐にわたっており、卒業後の所属学会も極めて多様なため、分野を越えた交流の機会を求める声もたびたび聞かれます。第1期生から新卒生迄の合同の同窓会に当たる「東大科哲の会」を定期的に開催することにより、これらの問題が解決され、専門分野、世代の相違を超えて真に学際的な同窓生の交流の場が提供されるものと期待しております。

教官（経験者を含む）も同等の資格で参加頂くというシニアの会以来の特色を継続したく思いますので、同窓会という表現はとりませんが、意のある所をご理解頂ければ幸いです。

東大科哲の会発起人一同（五十音順、氏名の前の○：設立準備委員）

- 池浦定彦、伊東俊太郎、○上野紘機、大倉文雄、小川真里子、
- 大場利康、○岡本拓司、○小倉勝男、金子務、川崎勝、○菊池よし子、
- 木原英逸、○木村絹子、○木村往宣、小松美彦、佐々木力、○住田友文、
- 大黒岳彦、○多羅尾良吉、○辻中裕子、奈須野太、橋本毅彦、廣松毅、
- 丸山瑛一、村上陽一郎、○村田純一、○山田幸治、○吉次弘志